

令和 3 年度

事業所名 : グループホームあさひ 1F

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0390700052		
法人名	株式会社中央介護センター		
事業所名	グループホームあさひ 1F		
所在地	〒028-0014 久慈市旭町10-66-1		
自己評価作成日	令和4年1月7日	評価結果市町村受理日	令和4年6月20日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

年度初めに、ユニット職員全員と話し合い、『思いやり』を理念として掲げました。全てにおいて、思いやりを持って対応する事で、一つ一つのケアや業務が丁寧になり、利用者だけでなく、職員間にも良い循環が生まれると考えています。
日々の業務では、個々の能力を見極め、維持する為に、利用者の表情や発言を含めた情報の共有に力を入れています。利用者に応じて、観察するポイントが変化していく為、対応等を頻繁に情報共有する事で、統一したケアに繋がりたいと考えています。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は、市内の市街地整備が進められた地域にあり、近隣には県立病院、福祉関連施設、薬局やスーパー等が立地し、新たに警察署も移転するなど、生活環境に恵まれている。ユニットごとに理念を作成し、1対1の個別ケアを意識的に進め、画一的な対応にならないように利用者ごとに担当者を配置し、ゆったりとした環境の中で、日々の支援を行う姿勢を基本としている。令和3年から、停電時のケースに応じた訓練を年1回行っているほか、研修講師の職員持ち回りを始め職員の主体的意識の喚起に努めている。利用者の職歴等の個々の生活履歴把握を心掛け、個々の状況に応じた対応に努めている。日常的な利用者との会話の中でもスピーチロック等の言葉の使い方について、経験年数を問わずユニット単位で相互に注意しあう空気感を大切にしている。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和4年4月25日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

令和 3 年度

事業所名 : グループホームあさひ 1F

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	地域密着型の考え方などは折に触れ話す様になっている。ユニット理念である「思いやり」を持って対応する事で、一つ一つのケアや業務が丁寧になり、利用者だけでなく、職員間にも良い循環に繋がりたいと考えている。	ユニットごとの会議で職員皆で話し合い、毎年度初めに理念を見直している。毎年度変更される場合もあり、人間の尊重、そして意思決定支援を現場の課題として考え、「当たり前のことを当たり前にする」をケアサービスの基本として大切にしている。会議での共有や部屋に貼るなどして、日常的な振り返りを行い浸透するように努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	直接的に地域住民との交流は日常的に行っていない。通常であれば、施設行事への案内を出したり、秋祭りを見学している。	高校生等の職場体験とボランティアは継続して受け入れており、高校の2、3年生が3ヵ月間の間に1週間ずつ職場体験実習を行っている。コロナ禍前は、地区の盆踊りに出掛けたり、事業所の行事案内を出したりしていたが、コロナ禍の今は中止になっている。収束後には、外部との交流を再開したい。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	通常は、運営推進会議を通して地域の方へ取り組みを伝える様にしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議を開催している場合、会議の内容については、施設内の会議やユニット会議に反映している。	地域包括支援センター職員、町内会長、隣接の福祉用具事業所関係者で構成され、令和3年からは書面会議として質問書の様式を資料と一緒に送付し、意見提言の機会確保に努めている。委員からは、利用者の空き状況の照会を頂いている。民生委員の加入を働きかけてはいるが、未だ実現には至っていない。	運営推進会議の委員は、地域における事業所のサポーターとして、事業所の理解者であり、かつ緊急時等の直接・間接の支援者です。今後は、地域包括支援センターや社会福祉協議会等と相談の上、消防・警察関係者のオブザーバー参加も含め、運営推進会議の一層の充実強化を期待します。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市の担当者とは、運営推進会議に参加して頂いているほか、毎月何らかの形で交流を持っている。	地域包括支援センターや広域連合から情報提供等をいただくなど連携を図っている。行政とは、入居や処遇困難ケースへの対応などの解決に向け一緒に取り組んでいる。一人暮らしで自宅での生活が困難と思われた方に、行政と連携して緊急入居対応を行ったこともある。	

令和 3 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホームあさひ 1F

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎月の会議にて、身体拘束について議題にしている。また、年に1回は施設内研修で身体拘束を取り入れている。	事業所の連絡会議で、身体拘束しないケアについて話し合っている。外に出たい方がいれば、職員が付き添って一緒に外出しており、転倒の危険性など家族と話し合い、リスクを共有している。防犯目的で夕方7時から翌朝6時半まで玄関の施錠をしているが、日中は行っていない。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされないよう注意を払い、防止に努めている	介護職員へは、資料や報告書を配布、内容周知に努めている。虐待防止については2ヶ月に1回の社内研修の中に組み込んでいる。また、毎月の会議で身体拘束同様に確認しあっている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	本年度は、実際に成年後見制度を適用したケースが他ユニットであった為、その内容を会議で議題とし共有している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約に関しては、ご家族宅へ訪問又は来所して頂き、十分に説明を行ったうえでやっている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	月に1回施設長、管理者、当日の日勤者が集まり会議(社内ケア会議)を行い、話し合いの場を設けている。	令和3年度半ばから、集団ケアから個別ケアに意識的に移行し、利用者の意見を聴きやすい介護への転換を行っている。実際にはどのような方法で行うべきなのか、まだ試行錯誤の段階にあるが、把握した思いをユニット会議で話題にし、ケアプランに反映した上で実践しているものもある。家族の意見は、ケアプランの説明時や受診同行時に聴くことが多い。	

令和 3 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホームあさひ 1F

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に1回各ユニットでユニット会議を開催し、現場からの意見を吸い上げ、連絡会議(各ユニットの管理者やケアマネが出席)にて検討している。	連絡会議を経て、実際に職員の意向に沿って、宿直後の休み方や車椅子リクライニングシート使用から通常使用への転換、タブレットの購入等の提案を具体化している。令和3年度からは、職員が輪番で研修講師を務め、職員の主体的意識の喚起を図っている。今後、職員、ユニットリーダー、管理者の三者面談を考えていきたいとしている。	職員の資質と利用者へのサービスの向上に向け、身体拘束廃止や虐待防止、成年後見等を事業所内の議題として積極的に取り上げており、今後とも研修体制の一層の充実強化を図っていくよう期待します。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職場環境・条件の整備には取り組んでいる。今年度はアンケート調査の実施やユニット間の交流といった取り組みを積極的に行った。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	ユニット会議に合わせて、短時間の研修を毎月実施。 また、今年度から「人材育成」と「褒める(褒めて成長させる)」事を管理者、ケアマネ、そして現場職員に浸透させる取り組みを始めた。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	GH協会の役員を選出。研修や座談会の実施を検討中である。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ケアマネのアセスメントやケアプランを中心に本人の状態や意向の把握に努める。その後は、担当職員とケアマネを中心に、月1回のユニット会議内で入居者様の様子や変化等を話し合う時間を設け、情報共有に努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	利用申請時の相談を受け、更に利用前に自宅(病院)へ訪問、本人、家族との面会等を行い再度意向要望を確認。その情報をまとめ情報共有を行った上で利用開始して頂くようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人と家族が必要とする支援に関して他のサービス利用を視野に入れる必要がある場合は、最初に併設している事業所の可能性を考慮する。さらに、その他のサービス利用の選択肢も家族へ都度提案している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人が出来る事は維持出来る様に支援している。また、利用者様同士の間人間関係を配慮した支援を心掛けている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	現在は、事前連絡を頂き、別室での面会を実施。他の面会者同士が重ならない様に配慮している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	現在は出来ない事が多いが、利用者の認知症状に合わせ、「自宅訪問」といったかたちで、自宅周辺へドライブに行く取り組みも実施。	入居前に本人・家族と面談して、慣れ親しんだ人や場所、物などの情報を把握し、入居後もユニット内の馴染みの関係作りに努めている。同一建物内の小規模多機能サービスから入居する場合は、仲の良い職員が担当し、新しい環境に馴染みやすいように配慮している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係把握に努めている。利用者の「好き嫌い」に配慮した支援を行っている。(席や誘導の順番など)		
22		○関係を断ち切らない取り組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院期間が長くなり、利用中止(契約破棄)になったご利用者様に対しても相談に応じ、必要であれば経過をフォローしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	毎日の過ごし方や言動を観察し把握に努めている。担当職員を中心に、ケアマネと協力しプランにし、情報共有している。	例えば全体体操をやめるなど、画一的ケアを避けて個別ケアに重点を置き、利用者ごとに担当者を配置し、ゆったりとした環境の中で1対1の時間を設けている。利用者の声や動作から何らかのサインを汲み取り、入居者の欲求をケアプランに盛り込んでいる。	

令和 3 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホームあさひ 1F

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用開始前に本人の生活歴を調査した内容(アセスメント)によって、各職員が把握する様にしている。 また、日常的な会話の中から情報を得る様にしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	バイタル測定や排便状況の確認等変化を追うことで現状の把握に努めている。 また、3ヶ月に1回位のペースで担当職員が評価を実施している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月行われるユニット会議で、担当職員とケアマネを中心に、利用者の変化や様子、必要な支援等を話し合っている。	介護計画は、ケアマネが参加するユニット会議での話し合いを経て、ケアマネが原案を作成し、家族の同意を得て成案としている。パーセル・インデックス、長谷川式認知症スケール等を活用しつつ、モニタリングを経て3ヵ月毎に介護計画を見直している。暮らしの中で本人の思いを把握し、ユニット会議を経て介護計画に反映し、実践しているものもある。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別の記録は行っている。職員間の情報交換に関しては、日報等で申し送る。また、口頭でも申し送る様に意識している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人や家族の生活状況に合わせてサービス提供を行うように努めている。 可能な範囲で個別ケアを行う様にしている。自由度を高める取り組みを検討中である。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	通常は、家族だけでなく近所の方、親戚など本人が今まで関わってきた方の把握に努め、面会等は柔軟に対応している。		

令和 3 年度

事業所名 : グループホームあさひ 1F

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用以前の主治医がいる方に関しては、極力主治医を変更しない様な支援をしている。また、主治医が変更した場合も職員が同行したり、各病院の相談員と連携を取るようになっている。	入居後もこれまでのかかりつけ医に継続受診することを基本としている。変更する場合には、紹介状で引き継ぎしている。18人中数人程度が家族対応同行で、ほかは職員対応で受診結果はその都度家族に報告している。家族対応の場合は、家族に直接聞かメモの手交としている。歯科の訪問診療を受診している利用者もいる。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師を配置してはいないため、適切な看護が受けられているわけではないが、併設施設の看護師に相談可能な状況ではある。さらに、受診対応に関しては異常があった場合極力早い対応を心がけている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院した際は、必要がある場合は情報提供を行う。また、退院に関しては各病院の相談員を窓口に家族の方とも連絡を取り退院後の受け入れ円滑に行える様に取り組んでいる。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	事業所単独では実施していない。しかし、看取りに関しては、数年前より、関連施設が整備された為、「看取り」を希望される方には、そちらも紹介している。	入居時に、看取りが困難であることを家族等に説明し了解を得ている。経管栄養やたん吸引もあり看護体制としては難しいため、看取りは行っていない。事業所での対応が困難になってきた場合には他の施設を勧め、終末期の対応を相談された場合には、隣町の看取り対応ができる関連施設を紹介している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の対応のマニュアルを掲示したり、AEDの講習会を開いている。(全職員が普通救命講習受講済み) また、職員には緊急性を感じたら迷わず119番通報(救急車の要請)するように、日頃から伝えている。		

令和 3 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホームあさひ 1F

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	昨年度は、水害を想定した訓練を実施。夜間想定で実施。	ハザードマップ上は30cm程度の浸水想定区域にあるため、令和2年には夜間想定の水害訓練で本館2階への垂直避難を行っている。令和3年秋から、停電時のケースに応じた訓練を年1回行っている。発電機や水溜タンク、反射式ストーブのほか、保存食を3日分備蓄している。	運営推進会議への参加等の消防団との協力関係を構築するとともに、避難可能な限界時間を消防署等から確認した上で、発災時の的確な避難が可能となるよう、更なる進展を期待します。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉使いや人格の尊重は心がけている。また、言葉遣いに関しても、ユニット会議での議題として改善に取り組んでいる。	職員が発している言葉の内容や語調等が、利用者の誇りを傷つけたり、プライバシーを損ねないよう配慮している。言葉遣いに関しても、ユニット会議での議題として改善に取り組んでいるほか、身だしなみや言葉使い、プロ意識を持つことなどについての接遇研修を年に1回行っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の希望を尊重し、自己決定できる様に支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	本人がその日どのように過ごしたいかの希望に添っている時間帯もあるが、基本的には、日課を取り入れたり、全体的な流れにそった支援をしている。 参加したくないという人の意思は尊重している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	乳液や髪結い、パーマ等多様な希望に添う支援をしている。身だしなみがちぐはぐにならない様、TPOに合った服装の手伝いをしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	本人の好みや能力に応じて提供しているが、苦手な食材がある場合は可能な限り代用品を用意して対応している。また、出来る利用者様とは職員と一緒に片付け等を行っている。また、おやつ の買い物や居室での飲食も実施している。	食事は系列会社から配達され、職員が入居者の食事形態に合わせ手を加え提供している。献立には利用者の好みも反映されている。また、季節毎に、たこ焼きやホットケーキ、パフェなどを作り、皆で楽しんでいる。コロナ禍の収束後には、外食を楽しみたいとしている。	

令和 3 年度

事業所名 : グループホームあさひ 1F

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量の把握は行っている。また、体重測定を行い、体重の変化に応じた対応を行っている。また、水分補給には気を使い、お茶や水だけでなく、経口補水液を作り、身体状況や好みに応じて対応している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアは行っている。なるべく本人に行ってい頂けるような促しを行っている。また、口腔内の異常を発見した場合は、都度歯科受診対応等(往診等)を行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	トイレ誘導や声かけ等の工夫をし、なるべくトイレでの排泄を行なって頂けるような支援を心掛けている。	時間をみて声掛けする方やソワソワする動作をサインにトイレ誘導する方など、排泄パターンを把握しできるだけトイレで排泄するよう支援している。失禁を見られるのが嫌と思っている入居者には、羞恥心やプライドに配慮し、さりげなく対応している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘の状態(排便の有無)の把握には努めている。飲食物の工夫や運動の働きかけも行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴に関しては入浴日を設けて案内している。ただし、一人ずつ入浴しており、入浴時間は本人の希望を伺っている。	入浴は週に2回を基本としている。通常は一般浴槽だが小規模多機能ホームの特殊浴槽の利用も増加している。仲の良い入居者同士で脱衣所で話をしながら一緒に入浴することは有るものの、「ゆったり」入浴できるよう前の人が入浴している間は、次の人は浴室に入らないようにしている。入浴時の羞恥心や負担感などを察しながら、職員は柔軟に入浴支援を行っている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	就寝時間(消灯)は設けておらず、その人の生活習慣に応じて就寝して頂いている。また、昼夜逆転の予防としても、可能な範囲で日中活動的に過ごして頂ける様に支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	担当職員を中心に、本人の服薬状況の把握に努めている。誤薬や服薬もれをしない様に工夫をしている。服薬に関しての問題点や疑問は、近所の薬局の薬剤師に相談できるように連携している。		

令和 3 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホームあさひ 1F

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの生活歴や役割、嗜好品にも努めている。 季節感を大切にイベントで気分転換をはかたりしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。 又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	個別での外出は、現在出来ていない。 バスハイク等が多いが、外出する機会を設けている。	コロナ禍で外出は減少しているが、人込みを避けながら2カ月に1回位の頻度で久慈溪流や桜の名所、野田海岸などへドライブに出かけている。 天気の良い日の午後にウッドデッキから列車に大漁旗を振っていたところ、車窓から「いつもありがとう」とのお返しのメッセージが届き皆で喜んでいる。今後は、久慈秋祭りの復活開催を期待している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	希望がある方や金銭管理が出来る方に関しては、家族と協議し所持金を管理してもらっている。 基本的には、金額は家族に決めてもらうが、高額にならない様に依頼している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人、家族の希望に添って対応している。 手紙を受け取った時は返事を促し、場合によっては一部介助している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	不快感や混乱をまねく可能性があるものへの配慮は行っている。 また、季節感を感じれるような貼り絵や飾り付けを心がけている。	共用の空間は、利用者にとって不快や混乱を招くような刺激がないように配慮されている。長い時間イスなどに座っていると疲れるので、ソファを置き、安楽に座れるようにも配慮している。 ウッドデッキに車イスのまま出入りできるよう配慮されている。日常の活動の中で、季節に応じた作品を作り壁などに飾っている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間で気のあった利用者同士で過ごせるような配慮に努めている。 また、座席やテーブルの配置を配慮し、利用者同士の相性等を尊重して対応している。		

令和 3 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホームあさひ 1F

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好み のものを活かして、本人が居心地よく過 せるような工夫をしている	居室へはご自宅で使用していたものを持込んで もらったり、家族や本人が希望するものを持込ん でももらい、少しでも安心できるような配慮をして いる。	居室の入り口には目印を付け、自分の部屋を確 認できるようにしている。居室にはエアコンとヒー ター、ベッド、吊り棚が備え付けられている。安心 につながるよう、入居者は夫の遺影や位牌、家 族写真などを持ち込んでいる。朝・夕は次亜塩酸 の消毒を使用して清掃している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境つ くり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わ かること」を活かして、安全かつできるだけ 自立した生活が送れるように工夫している	出来ることは危険がない様に見守りをしながら、 本人に行っていただけるような支援を心がけてい る。		